

2024年度 専修大学 高校教員対象 研修プログラム

実施期間：2024年7月30日（火）、7月31日（水）

実施方法：専修大学生田キャンパス 9号館

主 催 専 修 大 学

後 援 文 部 科 学 省
神奈川県教育委員会
千代田区教育委員会

<2024年度 専修大学「高校教員対象 研修プログラム」ご案内>

★主催：専修大学

★後援：文部科学省、神奈川県教育委員会、千代田区教育委員会

★実施期間：2024年7月30日（火）、7月31日（水）

10:00 開講式

★実施会場：専修大学生田キャンパス 9号館

●小田急線 向ヶ丘遊園駅 下車（新宿から急行で約20分）

【バス】北口より「専修大学9号館」、「専修大学前」、「あざみ野駅」または「聖マリアンナ医科大学」行きバスで約10分

【徒歩】南口より14～20分（次頁をご参照ください）

●東急田園都市線・横浜市営地下鉄 あざみ野駅 下車

【バス】「向ヶ丘遊園駅」行きバスで約35分

★定員及びお問い合わせ先 ※(a)を@記号に置き換えてください。

教科	日時	定員	お問い合わせ先
倫理	7月30日（火）	40名	金子 洋之 hkaneko(a)isc.senshu-u.ac.jp
国語	7月30日（火）	30名	山口 政幸 yamachi(a)isc.senshu-u.ac.jp
日本史	7月30日（火）	50名	歴史学科 inforekishigak(a)gmail.com
世界史	7月31日（水）	50名	
英語	7月31日（水）	30名	上村 妙子 taekok(a)isc.senshu-u.ac.jp
地理	7月31日（水）	20名	松尾 容孝 matsuo(a)isc.senshu-u.ac.jp

※お問い合わせは、上記のEメールのみとさせていただきます。

※電話・FAX等でのお問い合わせはご遠慮ください。

★申込方法

専修大学ホームページより申込フォームに必要事項を入力し、
「送信」をクリックすることで申込手続きが完了となります。

2024年度高校教員対象研修プログラムHP

<https://www.senshu-u.ac.jp/event/nid00021816.html>

★申込締切：7月5日（金） 10:00まで

※応募多数の場合は、抽選とさせていただきます。当選された方には
受講方法に関する詳細を申込時にご登録いただいたメールアドレス宛
にご案内いたします。（7月12日（金）予定）

※なお、抽選にもれた方へも同日中にメールにてお知らせ致します。

★参加費：無料

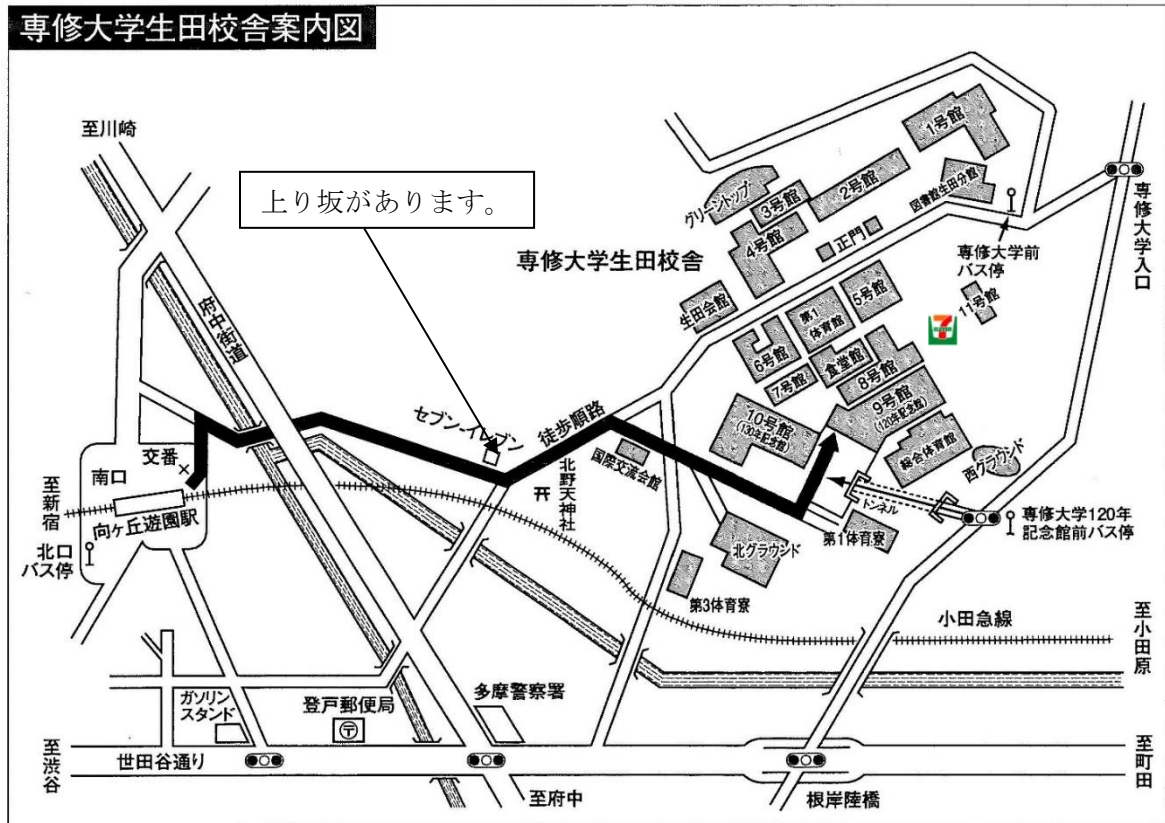
- 会場には駐車場がございませんので来場の際は公共交通機関をご利用ください。
- 本学では宿泊施設のご案内は行っておりません。

2024年度高校教員対象
研修プログラムHP



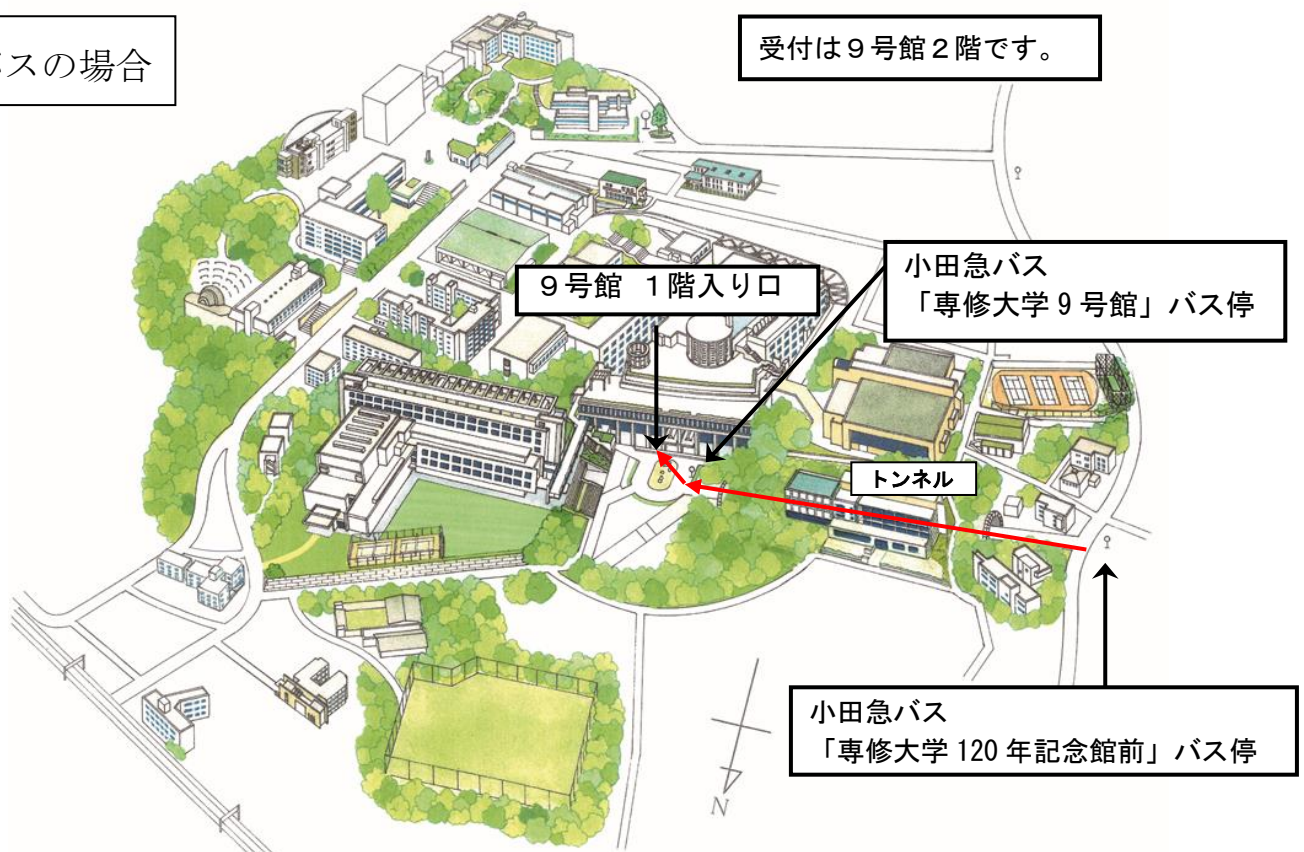
<会場（生田キャンパス 9号館）へのアクセス>

徒歩の場合 (向ヶ丘遊園駅からの徒歩経路) 所要時間14～20分



<会場（生田キャンパス 9号館）へのアクセス>

バスの場合



＜２０２４年度 専修大学「高校教員対象 研修プログラム」概要＞

倫 理 4

高校の教育から大学の哲学教育へ、あるいは大学の哲学研究から高校の教育へ

国 語 7

新たな国語への展望と日本語・日本文学文化

日本史・世界史 10

歴史研究の最前線

英 語 14

脱・英米英語の深化 ―変容する英語のアクセントと語法・語彙―

地 理 17

地域をとらえる地理的な視点

文学部学科紹介



倫 理

高校の教育から大学の哲学教育へ、あるいは大学の哲学研究から高校の教育へ

この研修プログラムの目的は、まず第一に大学での哲学の講義・教育が実際にどのように行われているのかを見ていただくことにあります。そしてそれを起点にして、高校の教育を大学の哲学教育にどう接続するか、大学の研究成果から高校の倫理や公民（あるいは論文指導）で使える材料をどう引き出すか、大学新入生の背景的な知識を大学側がどう踏まえるべきかなどの問題を考え、ご意見をいただいてまいりました。これは、本プログラムの基本的な目的であり、これまでその目的に沿った講義を用意してまいりました。しかしながら、近年は倫理という科目が縮小される傾向にあり、本年度からは、上記の目的に加え、論理的に文章を読むということがどのようなことであるのかという視点を取り入れてみたいと考えています。

期日：2024年7月30日（火）

定員：40名（応募多数の場合は、抽選とさせていただきます。）

10：30～10：40 挨拶・趣旨説明 担当：金子洋之（文学部教授・副学長）

10：40～12：00 「論理学は哲学的な文章の読解にどう資するか」講師：金子 洋之（文学部教授）

いささか難解な文章を読み解くとき、論理学の知見は必ずしも必要なわけではないが、あると便利なのもある。論理学で用いられるいくつかの技法をもちいて、もとの文章を変換することによって、文章同士の繋がりがはっきりと見えてくこともある。大学初年次の学生に対して、私はそのような読めたという感覚をもってもらうために、論理的なトレーニングと文章読解の練習をこれまでやってきた。この講義では、そこから得られた知見や論理的な技法の背後にある哲学的な考え方のいくつかを紹介・解説してみたい。

12：00～13：00 昼休み

13：00～14：20 「責任があるとはどういうことか」 講師：佐藤 岳詩（文学部教授）

現代社会に生きる多くの人は、日々の生活を送っている中で、誰それには責任がある、責任がない、責任をとって辞める、辞めずに責任を果たす、などということメディアで耳にしたり、実際に口にしたりする機会があるだろう。政治家や企業の重役などが負う社会的なものから、親が子に対して負うもの、個人が小さな失敗に対して負うものまで、責任が生じる場面は多岐にわたる。しかし、よく考えてみると責任とはいったい何だろうか。同じような結果を招く行為でも、責任が免じられるケースとそうでないケースがあるのはなぜだろうか。責任の捉え方の違いは、私たちの生き方、社会の捉え方にどのような違いをもたらすだろうか。本プログラムでは、他者の呼びかけに応答する（response-ability）ことを原義とする「責任」という概念の検討を通じて、私たちが他者に対して負っているもの、他者とともに生きるために必要なものについて、改めて見つめ直すことを目指す。

14：30～15：50 「食べる」 講師：檜垣 立哉（文学部教授）

食べる、ということは日常的な行為でありながら、そこには幾多の問題を含んでいる。そもそも食べることは、さまざまな「タブー」を含みながら何かの生き物を殺すことを前提としており、教育のなかの「育食」でも、自然との共生を主題としながらも、人間にとって後ろ暗い「食べるために殺す」という場面をどう扱うかが問題になるだろう。これは一見すると倫理問題のようにみえるが、むしろ人間という存在が「生きる」ということの初期条件をなすような「存在論的な問い」でありうる。

かつて、『豚のPちゃんと36人の小学生』という本（のちに映画）になっている、大阪北部での育食を題材として試みがあった。この件は、教育学的には批判が多く、その批判は正当にもおもえる。しかし他

面、哲学的に考えたときに、この試み（とりわけ最後に教員が、ほぼ問題解決を投げ出してしまうこと。そしてそのことははじめから自明であったではないかということ）は、人間が生きる以上、倫理的な後ろ暗さをもちつつも生きているものを「食べる」ということの「いかんともしがたさ」を示しているともおもわれる。「教育学」的な見地ではなく、哲学的に人間の生を考えた時に、この試みが含む多くの問題をどうとらえるべきか考えてみたい。

※それぞれの講義には質疑応答時間 20 分を設けております。本年は懇談会を行いません。

専修大学文学部哲学科
専任教員プロフィール（専攻分野）

（氏名の 50 音順。＊印は今回の研修プログラム講師。）

伊藤博明（いとう・ひろあき）教授	芸術論、思想史
出岡 宏（いずおか・ひろし）教授	日本倫理思想史／日本人の自然観、芸道の思想、小林秀雄の思想
金子洋之＊（かねこ・ひろし）教授	論理学、数学の哲学、言語哲学／直観主義の哲学的基礎、フレーゲ研究
佐藤岳詩＊（さとう・たけし）准教授	メタ倫理学／応用倫理学
島津 京（しまづ・みさと）准教授	芸術学／美術史
高橋雅人（たかはし・まさひと）教授	ギリシア哲学
貫 成人（ぬき・しげと）教授	現象学、現代思想、舞踊美学、歴史理論／身体論、歴史と世界システムの理論
檜垣立哉＊（ひがき・たつや）教授	フランス現代哲学 日本哲学 生命と自然
宮崎裕助（みやざき・ゆうすけ）教授	西洋哲学、ヨーロッパ現代思想、美学と政治、脱構築の思想

文学部 哲学科



新たな国語への展望と日本語・日本文学文化

今回は、新たな時代の高校国語への展望について 3 名の講師によりレクチャーを展開いたします。最初に、高校国語科の新しい科目編成を踏まえ、教材研究について具体的な観点から学習指導のあり方を検討した上で、教科内容に関連する各分野から鑑賞と解釈について探っていききたいと思います。

期日：2024年7月30日（火）

定員：30名（応募多数の場合は、抽選とさせていただきます。）

10:10～10:20 開会挨拶 山口 政幸（文学部日本文学文化学科）

10:20～11:20 日本語学的な視点から見た論理的思考力の育成

担当：山下 直（国際コミュニケーション学部日本語学科）

平成 30 年版高等学校学習指導要領の選択科目に「論理国語」があります。学習指導要領解説には「論理国語」について「実社会において必要となる、論理的に書いたり批判的に読んだりする資質・能力の育成を重視した選択科目である」と説明されています。ところが、このことを実践するのはそれほど容易なことではありません。高等学校の国語科の授業において「論理的に書いたり批判的に読んだりする」学習をどのように展開すればよいか困っている先生方が多くいらっしゃるのではないのでしょうか。そこで、本講義では実際に学習者が書いた作文を分析することなどを通して、論理的に書く力や批判的に読む力の土台をどのように作っていけばよいのかについて考えてみたいと思います。

11:20～12:20 教科書の万葉歌

担当：大浦 誠士（文学部日本文学文化学科）

奈良時代以前の歌集である『万葉集』は、その文学的時代性ゆえに大学入試においては出題されたことがきわめて稀である。それゆえに高校の教育現場においては本格的に扱われることの少ない作品である。しかし、我が国における文学の黎明期に成立した『万葉集』には、きわめて豊かな歌の世界が内包されている。今年のプログラムでは、高校教科書に載せられている万葉歌を取り上げて、その面白さを学術的に語ってみたい。

12:20～13:30 昼食と懇談／図書館見学ツアー（希望者）

13:30～14:30 『源氏物語』と書について

担当：松尾 治（文学部日本文学文化学科）

平安時代の書の背景として、和様の書や『源氏物語』をとおして、紫式部の書とはどんなものであったのか推測を交え考える。

専修大学文学部 日本文学文化学科
専任教員プロフィール（専攻分野と担当授業科目）

（氏名の50音順。印は今回の研修プログラム講師）

（下記科目のほか、「専修大学入門ゼミナール」「ゼミナール1・2・3」を担当しています）

- 今井 上**（いまい・たかし）教授 平安朝文学・文化研究
主な担当科目：日本文学通史／日本文学講義／日本文学研究
- 宇野瑞木**（うの・みずき）准教授 伝統文化・比較文化研究
主な担当科目：伝統文化研究／比較文化研究
- 大浦誠士**（おおうら・せいじ）教授 上代文学・文化研究
主な担当科目：日本文学講義／日本文化研究
- 小山内伸**（おさない・しん）教授 現代文学・演劇研究
主な担当科目：現代文化研究／演劇研究／現代文学研究
- 川上隆志**（かわかみ・たかし）教授 日本文化研究、出版文化論
主な担当科目：日本文化研究／出版文化論
- 小林恭二**（こばやし・きょうじ）教授 小説・俳句・演劇研究
主な担当科目：日本文化講義／文藝創作
- 鈴木愛理**（すずき・えり）准教授 近現代文学研究・国語教育研究
主な担当科目：日本文学研究／国語科教育法／教育実習
- 鳶尾和宏**（つたお・かずひろ）教授＊ 中世文学・文化研究
主な担当科目：日本文学概論／日本文学研究／日本文化講義／国語科教育法
- 廣瀬玲子**（ひろせ・れいこ）教授 中国文学研究
主な担当科目：中国文学史／中国文学講義／中国文学研究
- 松尾治**（まつお・おさむ）准教授 書学・書道史・書写書道教育
主な担当科目：書道／書道科教育研究
- 丸井貴史**（まるい・たかふみ）准教授 近世文学・文化研究
主な担当科目：比較文学研究／日本文化講義
- 山口政幸**（やまぐち・まさゆき）教授＊ 近現代文学・文化研究
主な担当科目：日本文学講義／日本文学通史／日本文学講読
- 米村みゆき**（よねむら・みゆき）教授 近現代文学・アニメーション文化論
主な担当科目：日本文学概論／日本文学講義／ビジュアル文化論／児童文学研究

専修大学国際コミュニケーション学部 日本語学科
専任教員プロフィール（専攻分野と担当授業科目）

（氏名の 50 音順。＊印は今回の研修プログラム講師）

（下記科目のほか、2・3. 4 年生のゼミナールを担当しています）

阿部貴人（あべ・たかひと）准教授 社会言語学

主な担当科目：社会言語学／日本語情報処理／日本語の社会的研究

王 伸子（おう・のぶこ）教授 音声学 日本語教育学

主な担当科目：日本語の音声／日本語教育実習 C／日本語表現論 1／日本語（留学生科目）

斎藤達哉（さいとう・たつや）教授 日本語の文字・表記

主な担当科目：日本語の音韻・表記

須田淳一（すだ・じゅんいち）教授 歴史日本語学 文法リテラシー教育

主な担当科目：日本語の歴史的研究／学習文法研究

高橋雄一（たかはし・ゆういち）教授 現代日本語文法 日本語教育学

主な担当科目：日本語の文法／第二言語習得研究

備前 徹（びぜん・とおる）教授 社会言語学 日本語教育学

主な担当科目：現代日本語の研究／日本語教育実習 B

丸山岳彦（まるやま・たけひこ）教授 コーパス日本語学

主な担当科目：日本語の語彙・意味／日本語情報処理／コーパス日本語学

山下 直（やました・なおし）教授＊ 日本語学 国語科教育学

主な担当科目：日本語学入門／国語科教育法

日本史・世界史

歴史研究の最前線

私たち歴史学科の教員は、学生に歴史学の面白さや意義を伝えるべく日々教育と研究に努めています。本プログラムではその成果の一端をお伝えし、新たな視点や歴史解釈をご紹介しますと思います。

高校の先生方との意見交換も本プログラムのねらいのひとつです。高等学校の歴史教育においては「歴史総合」が導入され、先生方も工夫を凝らしながら熱のこもった授業を展開しておられることと拝察いたします。先生方の日頃の授業実践についてお話を伺い、私たちも刺激を受けたいと願っています。豊かな自然に恵まれた生田キャンパスにおいて、皆様と直接交流を深められることを楽しみにお待ちしております。

日本史科目（講義A／講義B）と世界史科目（講義C／講義D）は、毎年新たな内容にて開講されます。研修へのご参加は、A・B・C・Dから全部、あるいは一部分を選んでいただくことが可能です。ご自由に組み合わせてお申し込みください。

期日：2024年7月30日（火）・31日（水）

定員：日本史・世界史（講義A～D）各50名程度、両日にわたり複数の講義に応募可

（応募多数の場合は、抽選とさせていただきます場合があります。）

◆ 日本史 7月30日（火）

10:10～10:30 ご挨拶（歴史学科全専任教員から一言ずつ）

10:35～12:15 「天文から読み解く平城京―遷都詔の再検討」（講義A）

講師：田中 禎昭（文学部教授）

平城京は高校日本史教育の重要なテーマのひとつですが、教科書では条坊制など都市構造の説明が中心で、遷都の思想や背景についてはほとんど記述がありません。この問題に関して、近年、環境史の視点から遷都を宣布した元明天皇の詔の再検討が進み、新たな議論が提示されています。本講義では、とくに元明天皇の遷都詔に記されている天文の記述に焦点を絞り、隋の造都思想との比較を通して、平城遷都の背景について考えてみます。

12:15～13:30 昼休み（歴史学科全専任教員との懇談／図書館見学）

13:30～15:10 「地域医療の歴史から近代化・大衆化・グローバル化を考える―近代日本の場合―」（講義B）

講師：廣川 和花（文学部教授）

近年、新型コロナの経験から疫病史が注目されていますが、人々の病に実際に向き合ってきたのが地域医療の現場です。近代日本における地域医療はどのように展開してきたのでしょうか。この講義では、歴史総合の3つの区分「近代化と私たち」「国際秩序の変化や大衆化と私たち」「グローバル化と私たち」に即した形で、近代日本における地域医療の「近代化」・「大衆化」・「グローバル化」を論じてみたいと思います。

15:10～ アンケート記入

◆ 世界史 7月31日（水）

10:10～10:30 ご挨拶（歴史学科全専任教員から一言ずつ）

10:35～12:15 「裁判記録からみた中国古代社会 ―新出土資料の魅力―」（講義C）

講師：飯尾 秀幸（文学部教授）

『史記』『漢書』などでは知ることができなかった秦・前漢初期の社会状況について、近年の出土簡牘資料の出現は私たちにそれを検討する機会を与えてくれました。今回は、その簡牘資料のなかから裁判関連文書を中心に紹介します。それらを史料として、郡県制度という国家支配のもとで、人々は郷、里とよばれる集落のなかでどのような関係を築いていたのか、さらにその人間関係と国家支配とは如何なる接点をもっていたのかを考えてみたいと思います。

12:15～13:30 昼休み（歴史学科全専任教員との懇談／図書館見学）

13:30～15:10 「歴史資料は何を語るか ―ある婦女売買事件の記録を読む―」（講義D）

講師：日暮 美奈子（文学部教授）

実証的な歴史研究においては歴史資料の分析や検討（史料批判）が欠かせません。近年、文書館資料のデジタルアーカイブ化とインターネット上での公開、オンライン・データベースの構築などが進み、さまざまな歴史資料の利用が可能になりつつあります。本講義では、そうした史料状況をふまえながら、19世紀末ドイツの行政文書に登場する婦女売買事件の捜査記録を手がかりとして、史料批判の可能性と課題について考えたいと思います。

15:10～ アンケート記入

2024 年度 歴史学科 専任教員16名のプロフィール

(50 音順。＊印は今年度の講師担当教員。業績は主なものを記載。)

飯尾秀幸＊（いとお・ひでゆき）中国古代史

【著書】『中国史のなかの家族』（山川出版社 2008 年）【論文】「秦・前漢初期における里の内と外」（『中国前近代史論集』汲古書院 2007 年）【共訳】「張家山漢簡『二年律令』訳注（1）」～「同（14）」（『専修史学』35 号～48 号 2003 年～2010 年）

鬼嶋淳（きじま・あつし）日本近現代史

【著書】『戦後日本の地域形成と社会運動—生活・医療・政治』（日本経済評論社 2019 年）
【共著】『戦後知識人と民衆観』（影書房 2014 年）／『新生活運動と日本の戦後—敗戦から 1970 年代』（日本経済評論社 2012 年）

小林孝秀（こばやし・たかひで）日本考古学

【著書】『横穴式石室と東国社会の原像』（雄山閣 2014 年）【論文】「つくば市西栗山遺跡出土の多孔式甕—渡来系資料の評価をめぐる視点—」（『生産の考古学』Ⅲ 六一書房 2020 年）／「関東北西部の横穴式石室—導入とその系譜をめぐる—」（土生田純之編『横穴式石室の研究』同成社 2020 年）

志賀美和子（しが・みわこ）インド近現代史〔歴史学科長〕

【著書】『近代インドのエリートと民衆 民族主義・共産主義・非バラモン主義の競合』（有志舎 2018 年）【共著】『わかる・身につく 歴史学の学び方』（大月書店 2016 年）／『論点・東洋史学』（ミネルヴァ書房 2022 年）

高久健二（たかく・けんじ）韓国・朝鮮考古学

【著書】『楽浪古墳文化研究』（学研文化社 1995 年）【論文】「楽浪・帯方郡埴室墓の再検討—埴室墓の分類・編年、および諸問題の考察—」（『国立歴史民俗博物館研究報告』151 号 2009 年）／「新羅積石木槨墓の埋葬プロセス—皇南大塚を中心に—」（『国立歴史民俗博物館研究報告』211 号 2018 年）

高橋和雅（たかはし・かずまさ）アメリカ近現代史

【著書】『カオスの社会史—戦間期シカゴのニアウエストサイド界限—』（彩流社 2021 年）
【共著】『歴史のなかのくちと—出会い・喚起・共感—』（彩流社 2020 年）【論文】「「地域コミュニティ」志向の芽生え—1930 年代シカゴ、ウエストサイド歴史協会の事例から—」（『専修史学』70 号 2021 年）

多田麻希子（ただ・まきこ）中国古代史

【著書】『秦漢時代の家族と国家』（専修大学出版局 2020 年）【論文】「親と子の距離感—中国古代の孝のあり方—」（樋口映美編著『歴史との対話—今を問う思索の旅—』彩流社 2023 年）／「中国古代家族史研究の現状と新たな課題」（『歴史評論』785 号 2015 年）

田中正敬（たなか・まさたか）朝鮮近代史・日朝関係史

【共編著】『地域に学ぶ関東大震災』（日本経済評論社 2012 年）／『関東大震災と朝鮮人虐殺』（論創社 2016 年）【論文】「植民地期朝鮮の専売制と塩業」（『東洋文化研究』13 号 2011 年）

田中禎昭＊（たなか・よしあき）日本古代史

【著書】『日本古代の年齢集団と地域社会』（吉川弘文館 2015 年）【共編著】『関東条里の研究』（東京堂出版 2015 年）【論文】「古代戸籍のなかの母子—大宝二年半布里戸籍にみる戸の編成と家族」（『国立歴史民俗博物館研究報告』235 号 2022 年）

中林隆之（なかばやし・たかゆき）日本古代史

【著書】『日本古代国家の仏教編成』（塙書房 2007 年）【論文】「石作氏の配置とその前提」（『日本歴史』751 号 2010 年）／「日本古代の「知」の編成と仏典・漢籍—更可請章疏等目録の検討より—」（『国立歴史民俗博物館研究報告』194 号 2015 年）

西坂靖（にしざか・やすし）日本近世史

【著書】『三井越後屋奉公人の研究』（東京大学出版会 2006 年）【共編著】『京都冷泉町文書』全 7 冊（思文閣出版 1991～2000 年）【論文】「近世後期江戸における地方出身者の転入と定着—天保十四年・高年御賞対象者を事例に—」（『専修人文論集』108 号 2021 年）

南修平（みなみ・しゅうへい）アメリカ史

【著書】『アメリカを創る男たち—ニューヨーク建設労働者の生活世界と「愛国主義」』（名古屋大学出版会 2015 年）【共著】『「ヘイト」に抗するアメリカ史—マジョリティを問い直す』（彩流社 2022 年）【論文】「「ブルックリン・ドジャースを探して」—労働民衆史から捉えたブルックリン・ドジャースとその移転」（『立教アメリカン・スタディーズ』34 号 2012 年）

日暮美奈子＊（ひぐらし・みなこ）ドイツ近現代史

【共編著】『＜近代規範＞の社会史—都市・身体・国家—』（彩流社 2013 年）【論文】「帝政ドイツと国際的婦女売買撲滅運動—西部国境を越える女性の移動から考える」（『歴史学研究』925 号 2014 年）／「アウグステ・ヴィクトリア—皇后の「使命」と母性」（『専修史学』71 号 2021 年）／「帝政期ドイツにおけるある婦女売買事件の分析」（『専修史学』74 号 2023 年）

廣川和花＊（ひろかわ・わか）日本近代史

【著書】『近代日本のハンセン病問題と地域社会』（大阪大学出版会 2011 年）【論文】「「隔離」と「療養」を再考する： COVID-19 と近代日本の感染症対策」（『専修人文論集』109 号 2021 年）【共訳書】アン・ジャンネッタ『種痘伝来—日本の〈開国〉と知の国際ネットワーク』（岩波書店 2013 年）

松本礼子（まつもと・れいこ）近世フランス社会史・都市史

【共著】『地域と歴史学—その担い手と実践』（晃洋書房 2017 年）／『〈フランス革命〉を生きる』（刀水書房 2019 年）【論文】「18 世紀後半パリのポリスの特質—『悪しき言説』をめぐる取り組みを手掛かりに」（『西洋史学』253 号 2014 年）

湯浅治久（ゆあさ・はるひさ）日本中世史

【著書】『戦国仏教』（中公新書）（中央公論新社 2009 年）／『蒙古合戦と鎌倉幕府の滅亡』（吉川弘文館 2012 年）『中世の富と権力—寄進する人びと』（吉川弘文館 2020 年）

歴史学科



脱・英米英語の深化 —変容する英語のアクセントと語法・語彙—

英語英米文学科では受講者と講師、および受講者同士が交流を深め、有益な情報交換の場を提供するために、本年度も教員研修を実施する運びとなりました。

期日：2024年7月31日（水）

定員：30名

プログラム

10：15 - 10：20 開会の挨拶

10：30 - 12：00 World Englishes を聴いてみる
 講師：田邊祐司（文学部教授）

“脱・英米英語化” (de-Anglo-Saxonisation of the English language) という言説は 1970 年代頃から「国際英語論」の研究者から提唱され始めました。そこから半世紀が経過した現代、研究者の予測通り、英語は英米人の手を離れたと言っても過言ではありません。実際、TV、ラジオ、映画、インターネットなどのメディアからは非英語母語話者の英語を耳にすることが当たり前になっています。本年度のセミナーでは、英語という言葉を取り巻くこうした社会言語環境の大きな変容を踏まえながら、国際英語論の背景を概観し、いろいろな地域の非英語話者が語る英語をディクトグロス (Dictogloss) という手法を通して比較・分析し、グローバル時代における英語指導のこれからを一緒に考えてみます。

12：00 - 13：00 Lunch Break ／ 図書館ツアー（希望者のみ）

13：05 - 14：35 Exploring language varieties by looking at English and Englishes
 Lecturer: Peter LONGCOPE（ロンコープ・ピーター 文学部教授）

This talk will focus on defining English as a pluralistic language and describing different language varieties, paying particular attention to regional dialects, social dialects, ethnic dialects, and language styles. The talk will draw on different examples from English to help to illustrate these different varieties. The talk will mainly give examples of grammatical, pragmatic, and lexical differences of these different varieties of English, although some phonological differences may be briefly touched on. In addition, some examples of different discourse features of different language styles will be discussed. The talk will also have a discussion about what standard language and standard language ideology are and the problems these present, especially for English. Finally, the talk will look at the implications of all of this for the teaching of English as a foreign language, especially from a critical pedagogical perspective.

14：40 - 14：50 アンケートのお願い

14：50 - 15：00 閉会の挨拶

専修大学文学部英語英米文学科

専任教員プロフィール

(50音順。*印は今年度の講師担当教員。業績は主なものを記載。)

石塚 久郎 (いしづか・ひさお) イギリス研究、医学史、文学と医学

【著書】 *Fiber, Medicine, and Culture in the British Enlightenment* (Palgrave Macmillan 2016年) 【論文】
Enlightening the fibre-woven body: William Blake and eighteenth-century fibre medicine (*Literature and Medicine* 25号 2006年) 【監訳】『病短編小説集』(平凡社ライブラリー 2016年)

大久保 譲 (おおくぼ・ゆずる) イギリス文学 (特に近代イギリス小説)

【論文】「ジョン・ファウルズ『フランス軍中尉の女』～外来種と小説～」(『二〇世紀「英国」小説の展開』松柏社 2020年) / 「ワイルド、ドイル、秘密の手紙」(『オスカー・ワイルド研究』18号 2019年) / 「手の物語：アーサー・コナン・ドイル『緋色の研究』と『SHERLOCK』第1話「ピンク色の研究」」(『イギリス文学と映画』三修社 2019年)

岡部 玲子 (おかべ・れいこ) 英語学、心理言語学

【論文】「語彙爆発—日本語の自然発話コーパスに基づく考察」(『専修人文論集』109号 2021年) / Lexical integrity and acquisition of N-N compounds in Japanese: A preliminary study (『言語研究の楽しさと楽しみ』2021年) / V-V compounds in child Japanese: An experimental study (*Journal of Japanese Linguistics* 34号 2018年)

片桐 一彦 (かたぎり・かずひこ) 英語教育学、英語教員養成、言語能力の推定

【論文】The Impact of Early English Exposure/Education on Vocabulary Size Through Bayesian Hierarchical Modeling: An Additional Analysis of Katagiri (2019) (*The Annual Bulletin of the Humanities, Senshu University*, 54号, 2024年) / 「コアカリ導入前の教職履修学生の学修と発達状況：言語教師ポートフォリオ (J-POSTL) の省察を通して」JACET関東支部紀要8号 2021年) / Speaking proficiencies among Japanese high school EFL students over a three-year period (*The Japan Language Testing Association Journal* 16号, 2014年)

上村 妙子 (かみむら・たえこ) 応用言語学、英語表現論

【著書】*EFL Grammar for Japanese Students and Teachers* (Senshu University Press 2020年) / *Teaching EFL Composition in Japan* (Senshu University Press 2012年) / 身近な異文化コミュニケーション—ここにユニバーサルデザインを—(パレード) 【論文】Producing summaries of expository writing: Examining contextual effects (*KATE Journal* 34号 2020年)

菊地 翔太 (きくち・しょうた) 英語史、歴史社会言語学

【論文】A comparative study of *wh*-relativizers in Shakespeare and Fletcher (*Studies in Modern English* 33 2017年) / Relativizers in Shakespeare's drama: A sociolinguistic study (*Studies in English Literature. Regional Branches Combined Issue* 7 2015年)

Hamish Gillies (ギリズ・ヘイミッシュ) 応用言語学、第二言語 (外国語) としての英語教授法

【論文】L2 narrative identity as drama: Exploring links between L2 learning experience and the ideal L2 self (*TESL-EJ* 27(1)号 2023年) / 【共著】Versifying adversity: Using dramaturgically framed poetic inquiry to explore complexity in the second language learning experience (*System* 110号 2022年)

佐々木 優 (ささき・ゆう) アメリカ文化・文学

【著書】*Media Representations of African American Athletes in Cold War Japan* (Peter Lang 2020年)
【論文】“Tigerbelles of Tennessee State University: Race, Gender, and the 1964 Tokyo Olympic Games.” (*The Griot: The Journal of African American Studies* 37.1 2018年)

末廣 幹（すえひろ・みき） イギリス演劇（特にシェイクスピアと17世紀演劇）

【論文】「Stepping Westward ベン・ジョンソン喜劇のトポグラフィ」（『人文学報』342号 2003年）
／「イスラム恐怖を超えて『オセロー』とトルコ化の不安のレトリック」（日本シェイクスピア協会編『シェイクスピア～世紀を超えて～』 研究社 2002年）

*田邊 祐司（たなべ・ゆうじ） 英語教育学、英語音声指導・習得、日本英語教育史

【著書】『句動詞のトレーニング「普段着の英語」を身につけよう！』（単著、大修館書店 2023年）
／ 文科省検定教科書 *Genius English Logic and Expression III*』（編集代表、大修館書店 2023年）
／『Expanding Horizons 世界を巡る映像で学ぶ総合英語 Book 3』（共著、南雲堂 2023年）【論文】
「回想 英語名人 河上道生先生のこと」『日本英語教育史研究』第37号（pp.61-79、2022年）

道家 英穂（どうけ・ひでお）イギリスの詩、西欧文学の思想史的研究

【著書】『詩と世界のヴィジョン～イギリス・ロマン主義から現代へ～』（平凡社 2023年）／『死者との邂逅～西欧文学は〈死〉をどうとらえたか～』（作品社 2015年）【翻訳】ロバート・サウジー著『タラバ、悪を滅ぼす者』（作品社 2017年）

中垣 恒太郎（なかがき・こうたろう） アメリカ文学、比較メディア文化研究

【著書】『マーク・トウェインと近代国家アメリカ』（音羽書房鶴見書店 2012年）／『ハーレム・ルネサンス——〈ニュー・ニグロ〉の文化社会批評』（共編著、明石書店 2021年）【論文】「チャップリンと1910年代アメリカ～「放浪者」像の生成～」（『アメリカ文学』76号 2015年）

三浦 弘（みうら・ひろし） 英語音声学・音韻論

【共著】『朝倉日英対照言語学 2 音声学』（朝倉書店 2012年）／『現代音声学・音韻論の視点』（金星堂 2012年）【論文】「STRUT 母音の変容と音素記号」（『専修人文論集』112号 2023年、<https://doi.org/10.34360/00013362>）【翻訳】ポール・カーリー、インガ・メイス、ビバリー・コリンズ著『イギリス英語音声学』（大修館書店 2021年）【その他】『三浦先生の英語音声学』（プロンテスト、2023年7月から月刊連載中、<https://prontest.co.jp/blog/professor-miuras-english-phonetics/>）

渡邊 真理子（わたなべ・まりこ） 現代アメリカ文学

【共著】『揺れ動く〈保守〉～現代アメリカ文学と社会～』（春風社 2018年）【論文】「幻影のアメリカ～*Being There* における擬似アイデンティティ～」（『アメリカ文学研究』45号 2009年）
【共訳】『スクリプナー思想史大事典』（項目翻訳）（丸善出版 2016年）

*Peter Longcope（ロンコープ・ピーター） 第二言語習得、第二言語教育学

【論文】Missing the mark? Looking at recent language acquisition policy decisions in Japan through the lens of SLA research（『専修人文論集』97号 2015年）／Language attitudes and language contact in an FL setting（『専修大学外国語教育論集』43号 2015年）／A multivariate analysis of interlanguage differences between learner levels（『英語学論説資料』43号 2009年）

文学部 英語英米文学科



地 理

地域をとらえる地理的な視点

環境地理学科の2名の専任教員が、それぞれの専門分野である自然地理学(気候学)および集落地理学(村落・農村地理学)の講義を行います。講義では、地域の気候特性を理解するための視点や、村落・農山村地域を理解するための視点について、具体的な事例に即して、研究方法を含めて紹介します。

期日 2024年7月31日(水)

定員 20名

10:10~10:20 挨拶：高岡 貞夫（文学部教授 環境地理学科長）

10:20~11:30 「地理的特徴からみる地域の気候特性」

講師：赤坂 郁美（文学部教授）

地域の気候特性には地理的特徴が大きく影響しています。その具体例を、東京都羽村市での気象観測結果をもとに紹介します。羽村市の西側には多摩川がつくった低地や段丘があり、崖線は主に公園緑地として利用されています。一方、市の東側には市街地が広がっています。このような地形や土地利用などの地理的特徴が、羽村市の気候特性にどのような影響を与えているのかを解説します。

11:30~12:30 昼休み

12:30~13:00 図書館ツアー

13:10~14:20 「十津川山村ー300年の地域変化ー」

講師：松尾 容孝（文学部教授）

日本各地において村の存続が不確実になっています。この現状を前に、大地と対話する学問である地理学にとって、地域をトータルに把握し、村の生きてきた軌跡と現状の把握に取り組むことは一つのミッションだと思っています。55 大字から成る日本最大の村奈良県十津川村を対象地に、地域に賦存している条件、位置特性、対外的役割・他地域との関係を振り返り、住民の生活・生産、諸機関と現地に保管されてきた史資料に沿って、江戸時代以降の十津川山村を解説します。

専修大学文学部環境地理学科

専任教員プロフィール（専攻分野）

（氏名の 50 音順。＊印は今回の研修プログラム講師。）

赤坂郁美＊（あかさか・いくみ）教授 気候環境学（身近な気候の成り立ちと変化、気候変動）

江崎雄治（えさき・ゆうじ）教授 人口地理学（人口移動、少子高齢化、地域人口の将来像）

苅谷愛彦（かりや・よしひこ）教授 環境地形学（地形発達、山地の環境変動、斜面変動）

鈴木比奈子（すずき・ひなこ）助教 環境保全学（ジオパーク、防災、ジオ多様性）

縫村崇行（ぬいむら・たかゆき）准教授 地理情報学（環境動態解析、測地、氷河）

高岡貞夫（たかおか・さだお）教授 生態地理学（森の自然の成り立ち、森と人のつながり）

松尾容孝＊（まつお・やすたか）教授 村落地理学（村の神秘の発見、現代農山村の地域構造）

三河雅弘（みかわ・まさひろ）准教授 歴史地理学（過去の景観や地域、古地図）

山本 充（やまもと・みつる）教授 地誌学、地域研究（ヨーロッパ・アジア）

文部科学省

<http://www.mext.go.jp/>



神奈川県教育委員会

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f6556/>



千代田区教育委員会

<http://www.city.chiyoda.lg.jp/kosodate/>



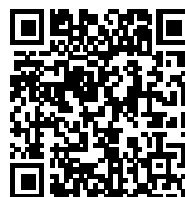
専修大学ホームページ

<http://www.senshu-u.ac.jp/>



専修大学文学部ホームページ

<https://www.senshu-u.ac.jp/education/faculty/letters/>



社会知性の開発をめざす

専修大学 文学部

高校教員対象研修プログラム実行委員会

〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1

TEL: 044-911-1254